

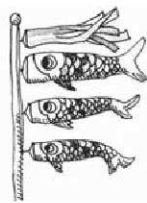
滞在中のパリには、大学でフランス文学を勉強している同郷のS君がいた。顔見知り程度であったが、異郷での再会に親しさを増し、2人でイタリア旅行をしようということになった。

パリのリヨン駅をブルートレインで出発し、ローマのテルミニ駅まで、途中ストライキがあり到着したのは35時間後だった。同じコンパートメントには、パリに出稼ぎに行っていたという中年のイタリア人がいた。大切な労賃を懐に、意気揚々として故郷に帰るその夜の就寝中、彼は有り金すべてを盗まれたのである。当然僕ら2人にも疑いの目が向けられたが、どうにか容疑は晴れた。

深夜に駅に着き、最後は握手をして別れたのだが、彼の打ちひしがれた様子は見るも無残であった。旅立つ前、気を付けるよう散々言われていたが、わかっていいるはずの現地の人ですら、こんなことにのっけから、盗っ人天下イタリアを目的の当たりにしたのである。

イタリア追想1981 I

ミルバのコンサートを知らせるポスターが目に残り、早速に行った。レコーディングセットから想像していた堂々たる風体のミルバとは全く違い、小柄でチャームィング。舞台の袖から登場するなり、グルンと前転したのには驚いた。イタリア



僕はこの路上に座るうつむきがちな彼らに、不躰にも見入ってしまった。まるで生きた塑像のようでもあり、ダ・ヴィンチの描く聖ヒエロニムスが現前するかのごとくに映った。

アでミルバ、この完璧な夕イミングを満喫し古い劇場を出ると、皆アイスクリームを食べていて、僕もカンツォーネの熱冷ましにと真似をした。

次のフィレンツェでは、小さな気持ちの良いホテルに行き合った。窓から差し込む澄んだ光に、シンブルな朝食がとても美しい。ルネサンス美術の集積地、世界に名をはせるフィレンツェが、来てみると、過去の栄華をそのままに意外にもこじんまりとたたずんでいた。そんな落ち着きをよそに、にぎわう観光客目当てか物乞いが多く、周りを喜々として歩く人々のギャップが際立つ。

すぐ近くには、町のシンボルであるダビデ像が立つ。この旅人を誘う巨大なレプリカが、空々しくも見えてくる。

(吉田 淳治・画家)